

---

# 蛙と螽斯

青

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蛙と螽斯

### 【著者名】

青

N2306N

### 【あらすじ】

蛙と螽斯のお話。

春に出会ったあなたを好きになった。たとえ、あなたが居なくなってしまうと分かっていても。

## 出会い

風が吹き抜けた。夏の暑くしつとりとした風ではなく、凜と澄み切った冷たい秋の風。落ち葉や穏やかな日の温もりに温められた草の匂い。それらすべてを含んだ風が体の中を抜けた瞬間、

「ああ、もう秋なんだ」

という実感と、切なさが押し寄せてきて。不意に鼻の奥がツンツンとして、慌てて水の中に飛び込んだ。じゃないと、泣いてしまいそうだったから。

冷たい水の中を進んで行く。水もすでに夏のそれではなくて。

「もう、秋なんだ」

私はもう一度同じことを呟いた。早く、彼に会いたかった。

私は蛙。好きなことは泳ぐことと歌うこと。小さな森で生まれ、兄弟達と暮らしてゐる。両親はいないけど、みんなで一緒に遊んだり、歌つたり寂しいことなんかなかつた。毎日が本当に楽しかつた。

その日も遊んでいて、少し疲れたから兄弟達の輪から抜け出して一人で池を泳いでいた。仰向けになつて顔だけ出して浮いてみる。春先の温かな空気が心地好い。でも、水の中にいると分かる。夏がもうすぐ来ることを。私は夏が大好きだ。むせ返るような熱気も。肌を焦がすような太陽も。どこまでも青い空も。草木や蝉達の賑やかな声も。どれも大好きなもの。今年の夏はあれをしよう。みんなであそこに行こう。もうすでにそんな計画で立てている。本当に夏が待ち遠しい。

しばらく水面に顔を出して春の穏やかな空を見つめていた。それから私はお気に入りの場所まで行くことにした。水の中を泳ぐ。一蹴

りごとに、体を包む水が撫でるように流れしていくのが心地好い。空を飛ぶのも、こんな感じなのだろうか？

しばらくして目的の場所に到着。水草が無く、そこだけ入江のようになつているところ。私が住んでいるところのちょうど反対側。そんに大きな池じゃないから、遠く離れているわけじゃないけど、時々一人になりたいときにやつてくる場所。開けたところなので、風がよく通り昼夜にも最高の、私の秘密の場所。

水から上がり砂の上に腰を下ろす。お気に入りの緑色の水着が水を吸つて少し重い。風が前髪を揺らした。しばらく目をとじて、ゆっくりと深呼吸した。体の中が一度空っぽになつて、そして全身の空気が入れ替わったような気がする。とても気持ちがいい。

私は歌を歌う。さつきまで兄弟達と歌つていた一番好きな曲。歌つているだけで心が温かくなつてウキウキしてくる、楽しい曲。誰もいないこの場所に私の声だけが響く。風に乗つて、どこまでも響けばいいな。そんなことを思つた。

すると突然、どこからかバイオリンの音が流れはじめた。それは私が歌つている歌のメロディーだつた。私は驚いて周りを見回した。しかし、誰もいない。その間もバイオリンの音色は私の歌つていた歌のメロディーを奏でている。それは、音楽をよく知らない私にも本当に上手で美しい音色だつた。私はそのメロディーに合わせてまた歌いはじめた。

楽しい。澄んだバイオリンのメロディーは滞ることなく流れ、それに合わせるように歌を歌う。それが、とても気持ち良かつた。私は嬉しくなつて、もっと大きな声で歌つた。バイオリンもそれに合せてより軽快に快活なメロディーを奏ではじめた。誰が弾いているのかも分からぬけれど、そんなことは今はどうでもよかつた。今

はただ歌うことがとても楽しく、面白かった。

やがて、歌も終盤に差し掛かりバイオリンのメロディーもゆっくりとなってきた。もつと、歌いたい。もつとこのバイオリンに合わせて歌いたい。もつとこの時間が続けばいいのに。私は非常に名残惜しい気持ちに駆られながら最後のワンフレーズを歌い切り、バイオリンのメロディーも、それを知っていたかのようにゆっくりと名残を残すように止んだ。当たりを静寂が包む。こんなに静だったのかと、私は驚いた。辺りは静だがまだ少しあつきの余韻が残っているような気がした。

ふと、後ろに気配を感じて振り返った。すると、そこには見たことのない男が立っていた。身長は私より大きい。ボサボサの髪と、伸ばしたままの鬚。着ている服もボロボロで辛うじて緑色だと分かる。背中には大きな鞄。そして、左手にバイオリンを持っていた。この人だ！と私が思ったのと同時にこの人も

「ああ、あんたか」

といった。

それがあんまりにも投げやりな「あんたか」だったので、ちょっとムツとして

「あんたって、何が？」

と言い返してやつた。すると

「さっきの上手な歌を歌つてた奴だよ」とこの人は言った。

相変わらずぶっきらぼうな言い方だったが、上手だと言われて私は少しビックリした。

「そうだよ。ここで歌つていたのは私。歌、上手だった？」

そう聞いてみると、男は素直に頷き

「ああ、よかつた。いい声だった」

といつてくれたので私はこの人を許してやることにした。「ありがとう。嬉しい。さっきのバイオリンはあなただよね?すくなく素敵だ

つた

私が笑つてそういうと急にこの人はそっぽを向いて  
「ありがと」  
と、つぶやくように言つた。髭で分かりずらいが少し頬が赤くなつ  
ているように見えた。

もしかして照れてる？ そう考えると急に可笑しくなつて私は笑つた。  
「ねえ。私は蛙つていうんだけど、あなたは何て言うの？」

「俺はキリギリスだ。よろしく」

そういうとキリギリスは手を差し出してきた。私はその手をじっと  
見た。「ゴツゴツとしていて私の手とは全く違う。恐る恐る手を伸ば  
し、その手を掴む。思った通り固かつたけれど、握つてみるととても  
温かくて優しい手だった。

「よろしく」

私がそういうと彼は嬉しそうに笑つた。  
それがキリギリスとの、出会いだつた。

（2章）

それから、私たちは色んな話をしてお互いの事を知つた。キリギリ  
スが旅をしているらしかつた。どこに行くの？ と聞くと、「宛ての  
無い旅さ」と言うので「気障だね」と言つてやるとまた赤くなつて  
そっぽを向いた。その仕種がとても可愛らしく、私はまた笑つてしまつた。キリギリスは悪い奴ではなさそうだった。私も沢山話した。  
自分のこと、兄弟達のこと。キリギリスは旅をしているせいかとて  
も物知りだつた。ここ以外でも私の仲間を見たことがあるという。  
私や私の兄弟はこの池を出たことがなかつたので、とても興味深か  
つた。お互いの話が一段落したところで、私は彼にバイオリンを演  
奏してくれるよう頼んだ。もう一度聞いて見たかったのだ。

彼は一つ返事で「いいよ」というとバイオリンを構えた。肩の上に

乗せてほお擦りするように構える。私は初めてバイオリンを弾くところを間近で見た。演奏者は服も見た目も汚いのにバイオリン綺麗に光つていてちょっと面白いかった。一呼吸すると、彼は演奏をはじめた。

透明なバイオリンの音色が体をそっと包むように優しく流れる。先程よりもゆったりとして落ち着いた曲。私は目を閉じてメロディーに浸つた。バイオリンの音色は少しだけ切なくて、とても美しい。初めて聞くはずなのに、なぜか懐かしいと感じてしまう。私はすっかりバイオリンに聞き惚れていた。とても穏やかな時間が流れていった。

そのあとも、何曲か彼にせがんで弾いてもらいう気が付けば辺りを夕日がオレンジ色に染め上げていた。

「もう帰らないと」私が言うと

「そうか」と彼は言ってバイオリンを下ろした。

本当はもっと聞いていたかったけれど、帰らなければ兄弟達が心配する。

「ねえ。あなたはいつまでここにいるの？」

バイオリンを入れ物に仕舞つているキリギ里斯に尋ねた。「分からないな。風の向くまま気の向くままさ」

肩を竦めて彼は答えた。

「本当に氣障だねえ」意地悪にそう言って笑つてやると彼はまた赤くなつて顔を背ける。その様は可愛いかった。

「じゃあ、もう少しはここにいるよね？」

「まあ、もう少しは」まだ少し赤い顔で彼は答えた。  
まだ少しあるのか。私はその答えを聞いて、またバイオリンが聞けるかもしれないこと、そして彼にまた会えるかもしれないことを嬉しく思った。

私は彼とそのバイオリンのことをすっかり気に入つてしまつていた。

「そつか」わざとそつけなく言つと私は立ち上がり水の中に入つて行つた。

「またね」振り返り彼にそういうと、彼は笑つて手を振つてくれた。ちょっと照れ臭くなりながら笑つて彼に手を振り返すと私は水に飛び込んだ。泳ぎながら彼の視線がまだ私を追いかけているような気がした。

その日からあの場所に出かけて行くことが私の日課となつた。私が行くとそこに必ず彼がいた。どうやらこの場所が気に入ったようで、私が行くと寝ていたり食事をしてたり時々バイオリンの作曲をしていたりした。最初こそまた来たのか、と言つていた彼も次第に私が来ることに慣れてしまつたようで何も言わなくなつた。

私は食事を作つたり、洗濯してやつた。あまりに彼が面倒臭がりだから。彼は私が作つた食事を美味しいと言つてくれた。それはよかつたが、彼の服はどれだけ洗つてないのか汚れ放題で洗うのに苦労した。そんな待遇を彼は悪びれる風もなくまるで当然と言う顔で享受していた。文句を言つても我関せず、という感じだが「恋人みたいだね」と言うと顔を真つ赤にして照れるので時々仕返してやる。

それから彼に頼んでバイオリンを聴かせてもらう。時には私と一緒に歌うように言つたり、彼から作曲した曲を聞いてほしいと言うこともあつた。彼の作る曲はいつも優しく美しい。だけど、どこか寂しい曲だった。

いつか、彼に聞いた。どうしてそんなメロディーを奏でられるのか。そうしたら彼は

「ただ、心の中にあるものをそのまま演奏しただけ」と答えた。もしそうなら彼の心の中はどんな世界が広がっているんだろう。私には及びもつかない。

いつも彼は間の抜けたような、だらし無い恰好でダラダラしている。でもバイオリンを弾くと顔が変わる。その真剣な横顔を見る時、私はドキッとする。だらけた恰好をしているがよく見ると彼はとても整った顔をしている。瘦せて細い顔も筋の通った鼻も一重の目も。本人が無頓着なので宝の持ち腐れだと思うが。

そんな彼と共に多くの時間を過ごしていくうち、私は彼に惹かれていた。彼に会えれば私はその日一日幸せだった。彼に会えない日は寂しくて仕方がなかつた。気が付けば彼のことを考えていた。今何をしているだろう。そんなことですら気になつた。私は彼に恋をしていた。彼のバイオリンが、彼の曲が、彼の仕種が、彼の笑顔が、彼が好きだ。気付いてしまえば止まることはなかつた。彼への気持ちは大きく膨らんでいった。そして、それは心地好いものだつた。彼を好きになつて行く自分が嬉しかつた。

でも、ある日私は知つてしまつた。もうじきにこの関係も終わつてしまつことを。

それは兄弟達と会話している時だつた。ふと、キリギリスの名前を私は兄弟達に聞いてみた。すると、兄弟達の中で一番物知りが答えた。

「キリギリス」

彼等は一力所に留まることなく旅をする種族。バイオリンを持ち、あちこちを回つている。バイオリンは自分の妻となるものを探す求愛の道具である、と兄弟が言つたときは少し驚いた。あれは、そのためのものだつたのか。それをほぼ毎日自分は聞いているのだと考えると少し嬉しかつた。だが、その先を聞いた瞬間その嬉しさも消えてしまつた。

「彼等は一年しか生きられないんだ。冬眠することができないから冬を越せないんだよ」

言われたことが理解できなかつた。その時私は一体どんな顔をしていただろう？兄弟の心配する声も聞こえなかつた。

冬を越せない？生きられない？

池の周りでは八年の眠りから目覚めた蝉達が力強い声で賑やかに鳴きはじめていた。

それからも、私は変わることなく彼の元へ通いつづけた。いつものように振るまい、いつものように彼に接した。それは相変わらず楽しい日々だつた。でも、心の奥での言葉はしこりのようにならぬから消えることはなかつた。

「生きられないんだ。」冬を越せない。

私のに突き刺さつたまま抜けない言葉。でも、私は彼にそれを問わなかつた。ただいつも以上に笑つて明るく振る舞つた。彼との時間を壊したくなかったから。夏が過ぎていつた。暑い夏になつた。待ちに待つた夏だつたけれど、私が思い描いていた夏ではなかつた。思い描いていた夏よりも、もっと楽しい毎日だつた。彼と泳いだり水の掛け合いをしたり一緒に散歩をしたりして遊んだ。

ある日、彼は私にバイオリンを教えてくれた。初めて持つバイオリンは軽くて壊さないか心配になるほどだつた。恐る恐るバイオリンに触れる私を見て彼は笑つた。最初はひどい音しか出せなかつたけれど、彼は丁寧に一から教えてくれた。彼の教え方は、上手でしばらくすると少しだけ私もバイオリンが弾けるようになつた。初めてバイオリンを弾けたことに感動して、私は彼に抱き着いてしまつた。抱き着いてから我にかえつて恥ずかしくなつたのだけど、彼も同じだけ喜んで私をギュッと抱きしめてくれた。すごく嬉しかつた。

その後も何度も練習したけれど結局、私は彼にバイオリンを返した。彼は少し残念そうな顔をしていたけれど、やっぱり私は彼のバイオ

リンを聞く方が好きだつたから。リクエストすると彼はいつもようにバイオリンを聞かせてくれた。暖かく優しいけれどどこか切なさを孕んでいて。そして聞く度に私を幸せにしてくれるメロディー。私は目を閉じながら耳を澄ませる。暑い夏のじつとりとしか空氣。からりと照らす強い日差し。その日差しを避けて逃げ込んだ草の影を時折吹き抜ける心地好い風。彼のバイオリンを聞きながら、彼と共にいられる時間。その幸せに浸つて何時までもこんな時間が續けばいいのにと何度も思った。

でも、そのたびに心の奥がチクリと痛む。あの言葉が私の妄想を打ち消す。

「生きられないんだ」

そんな夢はありはないのだと。いづれ必ず終わる。バイオリンを演奏する彼の横顔を見る。彼はいつか居なくなってしまう。彼のバイオリンを聞くことも、話すことも彼が私に笑いかけてくれることも失くなってしまうのだ。そう思うと、いいのない感情がうちから溢れてきて。頬を涙が流れた。慌てて顔を背ける。彼に気づかれまいように。その度に私は

でも、まだ。まだ冬は先だから。まだ。

と、そんな言葉で私は自分の心を騙していた。欺瞞だと分かつてゐる。それでも。

あなたの笑顔を見る度に泣いてしまいそうになるから。だから、私は笑いつづけた。笑つて今この時間を大事にしたかった。

## 出会い（後書き）

「蟻とキリギリス」のパロディを作るつもりだったのに、

いつもの場所に行くと、いつものように彼がいた。私の顔を見ると嬉しそうな顔をして手を振つてくる。私も笑顔で、振り返した。

「今日はちょっと遅かったな」

彼は何気ない感じでそう言つた。だが、私は言葉に体が固まってしまう。

「えと、ちょっと寝坊しちゃつてわ」

慌てて取り繕う私を

「なんだ、それ」

と彼は笑つた。私も合わせるように笑う。

本当は違う。兄弟達と食べ物を探していたのだ。冬籠もりに備えて。別にやましいことじやない。でも、なぜだか彼には言えなかつた。言いたくなかった。

しばらくは、いつもどおり彼と話したり彼の身の周りの世話をしたりして過ごした。最近では、彼はほとんど自分の身の周りのことを私に頼るようになつていた。めんぐくさがり、と私はその度に彼を叱る。でも、彼はどこ吹く風。

そんな代わり映えのしない、でも幸せだと思える時間。

こんな時間が何時までも続くことはない。

暗い考えが脳裏に掠める。その度に振り払う。今は考えないって、笑うつて決めたんだから。

知らず下を向いていた自分を鼓舞するよつこ、ぐつと顔をあげた私の鼻に小さな冷たい衝撃。

「あ、雨」

小さな雫はじきに数を増やして、シートシトと降る秋雨となつた。彼は荷物を手早くまとめて雨に濡れない岩の窪みに慌てて走つて行った。

私も雨は好きだけど、秋の雨は少し冷たすぎて体が冷えてしまう。だから、彼について行つた。

岩の窪みから彼と一緒に外を見ていた。雨は静かに辺りを包み込んで、ただ降り続く。近くの石に腰掛け、ポンヤリと雨を眺める。彼は隣で少し濡れた荷物を拭いている。静かな時間だった。でも、決して居心地の悪いものでは無かつた。彼が荷物を拭く音が続いている。私はポンヤリとその音を聞いていた。

不意に、彼が私に言った。

「最近、元気が無いな」

急に言わされたので、咄嗟に反応出来ず少しの間、固まってしまった。

「そ、そうかな? 別に何も無いけど?」

慌ててそう返したが、彼は何も言わずて私を見つめていた。

「何か悩み事?」

そう問われて、言葉に詰まる。心に小さな痛みが生まれた。その痛みを隠しながら、私は落ち着いてもう一度

「何も無いよ。大丈夫」

と笑つた。彼は私を見つめていたが、

「そうか。なら、いいけど」

と言つて微笑んだ。

心は少なからず動搖していたが、彼には気づかれてたくない。もつとしつかりしなければ。一度深呼吸をする。心の揺れは、だいぶ治まつた。

彼は荷物をあらかた拭き終わると相棒のバイオリンを取り出して、雨こよなく合っている、落ち着いた静かなメロディーが辺りに響く。ゆっくりと弾きはじめた。

私も目を閉じて、ゆつたりとそのメロディーに身を委ねた。ここには、私たちだけしか居なかつた。世界で2人だけになつてしまつたみたい。それでもいいかもしない。このまま、何も変わらなければいいのに。こつまで、ずっと…。

不意に彼が演奏を止めた。驚いて見ると、不安そうな顔をして彼は私を見ていた。

「最近、元気がないけど何があつたのか？」

一瞬、息が詰まる。彼は真っすぐに私を見つめていた。

このまま、胸の中の想いを何もかも話してしまおうか。そうすれば楽になれるかもしれない。そんなことが頭を過ぎる。でも。

「何もないよ？ちょっと最近忙しくて疲れてるのかも」私は何でもないようすに彼に笑いかけた。まだ彼は不安そうな顔をしていたが、しばらくして元の優しい顔に戻った。

「そつか。忙しいって、あれか？冬眠の準備つてやつ？」

「そ、そうなんだ。寝床の準備とか食料を集めてたぐさん食べないとダメだから忙しくて」

「そういうえば、最近ちょっと太つたよな」

もうつ、とむくれる私を彼は面白そうに笑つた。

「そうだ！あなたも一緒に冬眠しよう～暖かいところでもぐっぐ眠るの。気持ちいいよ？」

おどけて言つ私に、しかし彼は考え込むような顔をして

「でも、なんだか怖くないか？そのまま起きられなくなりそうだと、言つた。

そんなことは、ないよ。ちゃんと起きあがれるよ。むしり、タガ来て起きられなくなるのは…

それ以上、考えたくなかつた。彼がそばにいるのにこんなこと考えたくない。

急に泣きそうになつた。辛くて苦しくて泣きたくて、泣き出せたら少しでも楽になるんだろうけれど彼がそばにいるのに泣けない。泣いてはいけない。でも、彼の顔を見たらもう駄目だった。

「」めん！帰るね

そう言い捨てて、私は雨の中に走り出した。彼が何かを叫んでいた気がするが聞こえない。彼も驚いているだろ？。こんな駄目なのに。もつとしつかりしないといけないのに。

冷たい雨の霖が降り注ぐ中を走る。私の全身をぐっしょりと濡れていいく。でも、田元だけは熱い滴で濡れていた。

それから、私は彼の元へ行かなくなつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2306z/>

---

蛙と螽斯

2011年12月19日09時56分発行